



北大山岳部五十周年記念誌



山岳部創立の頃の回想

山口健児

五十年とは長い年月であり、また一瞬であるかも知れない。実際に五十年を過してみると、その中には色々な物が詰まっているのであることが、実によく解る。

しかし忘却は人間だけがもつ特権であるというから、皆が忘れかけていることに油をかけて、興味のない若い人達にまで迷惑をかけるような考えは毛頭ないつもりである。北大山岳部は、大正十五年十一月十日に創立されたのである。このことは伊藤秀五郎君の名文をもって、北大山岳部報第一号や、北大山の会の会報四二号（同じ文章が「北の山統編」にも転載してある）に明確に書き遺してあり、また渡辺千尚君が山岳部報第五号の「思い出」の中で証明している。この両君の書かれていることは正史である。

古い奴は古いことを知っているという特性を利用して、創立当時のことを観点を変えて眺めてみるのも、趣きが大分変り、しかも山岳部誕生記の二番煎じの誇りをも免れるだろうと思う。そこで山岳部創立の大きな背景をなしていた北大スキー部と、山とスキーの会という角度から記憶を辿ってみたい。

大正十五年という年は、我々にとって忙しい事が続いた。まず北大創基五十年の記念式典があり、スキー部は創立十五周年に当たっていたので、手稲バラダイスビェットの建設と、十五周年記念出版が行われ、そして北海道帝国大学文武会山

岳部が生れた。そして年末に山岳部のスキー合宿が新見温泉で始めて行われ、終つて昆布駅で新聞を見たら、日付は昭和元年となつていた。

大正十五年に私は「山とスキーの会」の月刊誌「山とスキー」第六年目の編輯を担当していたので、広田戸七郎、小野修兩先輩と、北五条西十一丁目に家を借りていた。そして記念出版編集の手伝いもしていたので、毎日がほんとに忙しかつた。

北大の学生で山の好きな連中は、予科では桜星会旅行部に集り、このうち恵迪寮に居たものは恵迪寮旅行部を別に作つていた。この他に大学全般として文武会スキー部というのがあり、大学生でも、予科実科専門部の学生でも山好きは皆ここに集つていた。

扱て、日本のスキー発祥については、明治四十一年に北大予科の独逸語講師に赴任して来られたハンス・コーラー氏が、一台のスキーを持参されたことに始まるのである。その翌冬に稲田昌植、宮部憲次（宮部金吾氏令息）角倉邦彦等の諸氏がこのスキーを拝借して三角山へ持ち出し、Der Schiなる本の写真に出ている格好を真似て滑つたと、稲田昌植氏の回顧談にある（北大スキー部十五周年記念誌）。従つて、これが日本に於ける最初のスキー滑降で、オーストリアのテオドル・フォン・レルヒ少佐が高田十三師団でスキー講習会を開いた明治四十四年一月よりは古い話である。

この時の Der Schi なる本は、多分 Henry Hoek の Der Schi であろうと思われる。コーラー先生は二冊のスキー書を将来され、もう一つはズダルススキーの本であつたというから、多分 M. Zdarsky, Alpen (Lilienfelder) Skifahrtechnik であろうと考えられ、山とスキーの会の蔵書の中に残つていたのを覚えてゐる。

当時のスキー術はオーストリーのマティアス・ツダルススキーが創始したもので、アルプスの険しい山地を安全に滑るために、一本の長杖と、スプリング付の縮具を具え、シュテムボーゲンを強調したものであつた。

明治四十五年二月レルヒ少佐は中佐に進級して、旭川の野砲兵七連隊付となり、直ちに将校等にスキーを教えた。そして翌月、札幌郊外の月寒において、レルヒ中佐直弟子の三瓶勝美中尉等により、一般人のためのスキー講習会が開かれた。

この月寒の講習会に、北大からは稲田、角倉等七名が参加し、この参加者が中心となり、ここに明治四十五年六月に文武会スキー部が創設されたのである。そして翌大正二年十二月、角倉邦彦、柳沢秀雄、荒木忠郎の三名は富士登山を決行、二合八勺までスキーを使用し、ついに大正三年一月一日に山頂に達している。

次いで大正五年になると、ノルウェーに留学中の水産専門部の遠藤吉三郎教授が、ノルウェー式縮具のスキーと複杖を持って帰朝され、その上彼地で習い覚えたスキー術をスキー部員に教えられたという。それ以来二本杖が普及するとともに、テレマーク、クリスチャニヤの技術が導入され、ここにスキーは軍隊式スキーの域を脱して、スポーツとしての新生面を開いてゆくのである。

やがてスキー部内に於ても、大正七年頃より、木原均、広田戸七郎、緒方直光氏等によって、スキージャンプの練習が始まり、スキー仲間には山党、畑党、燕麦党の区別が生じてくるようになってきた。すなわち山党は登山派、畑党は競技派、燕麦党はスキー滑降だけを楽しむ人々のことである。燕麦は山と畑の間に播く作物であるということから中間派を意味する名であった。

その後大正十三年より、医学部の大野精七教授が北大スキー部長に就任された。新部長はドイツ留学中に、スキー競技についてよく研究され、見学されてきたので競技の内容や知識が急に向上し、翌年には全日本スキー連盟が誕生、その翌年の大正十五年には国際スキー連盟に日本も加盟したので、スキー部に於ける競技スキーの比重は、次第に高まってゆくばかりであった。

やがてジャンプ部門には伴素彦、ディスタンス部門では岡村源太郎の両君を頂点とする錚々たる名手が輩出して、北大は日本のスキー競技に君臨する黄金時代を迎えた。

眼を転じて登山界の状況は、草鞋と金剛杖から登山靴、ピッケルへと脱皮してゆく近代登山の開幕の時期で、殊に大正十年榎有恒氏のスイスアルプスの峻峰、アイガー東北山稜の初登成功は、それまでの日本の登山界の様相を一変させてしまった。

特にスイスの雪山に憧れる冬季登山が開始され、大正十一年春には慶応の連中により、槍ヶ岳、剣岳の積雪期初登山がなされ、同じく十一年一月には加納一郎、松川五郎、板倉勝宣、板橋敬一、後藤一雄の諸氏によって旭岳登山が、大正十三年一月には佐々木政吉、田口鎮雄、藤江永次、伊藤秀五郎等の諸君により十勝岳登山がなされ、十五年一月には沢本三郎、小森五作、和辻広樹、井田清、高橋喜久司、山口健児らが、夕張岳頂上へのスキーでの初到達に成功している。

このような雪に埋もれた山頂を目指す厳冬の初登が一巡してしまつと、次はゾムメルシーによる陽光五月の登山が始まり、大正十四年五月には山口健児等が大雪山彙へ、十五年五月には西川桜等が石狩岳へ、同じ時に山県浩等は十勝岳よりトムラウシ山・オプタテンケ山脈の縦走に成功している。

かくて北大スキー部内における登山と競技の二つの潮流は大きくなるばかりで、一は競技の研鑽に余念なく、一は登山以外は全く無関心という状態から、スキー部の予算配分で揉めるといふ有様にまでなつてきた。

競技と登山との取扱いに就て、大正十五年の三月、スキー部の先輩や主要な幹部が集つて、来シーズンの運営等が協議された際、登山、競技両方面の一層の発展を期するため、山の連中が計画している山岳部の創立を補佐し、これから後は登山は山岳部にて行い、スキー部は競技専門の部にすることに決つた。そして将来山岳部へ出る者も、スキー部の十五年周年記念事業に一致協力することになつて、手稲パラダイス・ヒュッテ建設委員に、佐々木政吉、田口鎮雄、岩森秀夫、田中二郎が、記念出版の編集に山口健児が加わり、これで山岳部の設立がスキー部内で円満に解決した（大野精七著北海道のスキーと共に）。

ところで北大スキー部と表裏の活躍をした「山とスキーの会」は、先輩と現役を会員として作られ、その会誌「山とスキー」は北海道ばかりでなく、日本の草創期の登山とスキーの発達に盛り知れない貢献をしたものである。この会の発行したのは大正十年の四月で、会誌「山とスキー」の第一号は同年六月一日にアート紙刷りで発行されている。

創立者の一人、加納一郎氏の見聞談（山とスキー五十号）によると、提唱者は加納氏と板橋敬一氏であり、初めは予科

旅行部と北大スキー部の機関誌のつもりであったが、予科の旅行部にも先輩ができて、スキー部との円満な理解がなかったため、スキー部だけの雑誌となってしまったと記してある。しかしこの先輩が誰であったか、その経緯は解らないが、山岳部発生の胎動が推測される。

「山とスキー」の編集発行の中心人物としては、前記加納、板橋二氏の他に中野誠一、松川五郎、板倉勝宣という情熱家も揃っていたので、登山とスキーを専門に研究する日本において最初の独創的な性格をもった月刊誌として、特異な存在を続けることができた。また「山とスキー」が発行される前に「アルペンツァイツング」Alpenzeitung という名の、スキー部のガリ版の機関紙が発行されていたが、あまり知られていない。

「山とスキーの会」は会員組織で、最初の会則や会員名は不明であるが、「山とスキー」五十号に掲載のものを参考のため、次に記す。

山とスキーの会会則（大正十四年）

- 1 山とスキーの会はスキー及び山岳に関する月刊雑誌「山とスキー」を発行する為に、北海道帝國大学文武会スキー部関係者の組織する会である。
- 2 必要に応じ、雑誌の発行以外に、スキー及び山岳に関する各種の事業を行うことあり。
- 3 会員は幹事会の推薦により会則を承諾し、出資金一口以上引受けたるものに限る。
- 4 出資金額は一口金二十円とする。会員はこの範囲内においては常任幹事の指定により何時にても払込みをなすべきものである。
- 5 会員退会するときは常任幹事に通告しなければならぬ。しかし既に払込みし出資金は返還しない。会のため都合あるときは幹事会の決議により除名することがある。除名の際は払込出資金は返還するも在会中要した各種の費用を精算する。

- 6 会員中会務にたずさわる者を幹事とする。
- 7 幹事の互選により三名の常任幹事を定め、常に会務に当ることとす。
- 8 必要に応じ特定の事項について委員を置く。
- 9 毎月第二水曜日研究会を開く。常任幹事の必要と認めたる時は臨時之を開く事あり。
- 10 協議事項の決定は出席幹事一致の意見による。但し幹事会は幹事総数二分の一以上でなければ成立しない。
- 11 すべて役員は幹事会において定める。
- 12 毎年一回五月、会員の総会を開き会務の報告をする。幹事会において必要と認めたる時は臨時之を開く。
- 13 会員は会務につき、幹事に質疑し、又は提案することが出来る。
- 14 会則の変更、その他重要な事項は、総会において会員三分の二以上の賛否によりて決定する。

山とスキーの会会員（大正十四年現在）

相川正義、阿部謹吾、赤松勲、青木三郎、青山馨、伴素彦、長谷川敦、平井左門、平塚直秀、広田戸七郎、本田治吉、稻積猶、伊藤秀五郎、岩森秀夫、伊藤健夫、加納一郎、小林一勝、小森五作、桑森一郎、松川五郎、三田村健太郎、宮城孝治、村本金弥、宮沢精、三戸勲、並河功、内藤克三、中野誠一、南波初太郎、岡見清二、緒方直光、岡村源太郎、岡本三男、大久保鉄二、大島幸吉、小川玄一、緒方温光、小野修、佐々木政吉、須藤英雄、須藤宣之助、田口鎮雄、滝田次郎、高杉正樹、徳永熊雄、龍田不二雄、田中二郎、内海栄郎、山極三郎、山口健児、北大スキー部。

そしてこの「山とスキーの会」は大正十年より、昭和五年六月に至る九年間、北海道ばかりでなく日本中の登山とスキー研究者から尊敬と信頼を享けていたが、「山とスキー」が百号にて廃刊するとともに解散した。

第一号以来の執筆者は、今から見ても豪華な顔触れで、稲田昌植、郡場寛、坂村徹、木原均、館脇操の諸先生を始めとする学内の先輩学生の諸君は勿論であるが、外部よりの寄稿も壮観を極めたものであった。まず昭和三年、前穂高登攀中に突然姿を消した大島亮吉氏の数十篇に及ぶ原稿、その中には「山、研究と随想」に収められている「登山史上の人々」を始めとする多くの論文や、訳詩は、天下の岳人を魅了したものである。また榎有恒氏の「板倉勝宣君の死」や、松方三郎氏の「春の槍沢入」などから、青木勝、成瀬岩雄、舟田三郎、麻生武治の諸氏の玉稿。短文や写真を寄せられた方々には武田久吉、伊集院虎一、佐藤久一郎、岡部長豊、近衛直麿等の各氏の名も見られ、近代登山とスキーの黎明期に、先端的役割を果たした方々を網羅していたと言っても過言ではない。私は意識して山に関係の深い方々の名を拾い上げたが、スキーの競技関係でも、やはり当代を代表される執筆者が目白押しで、日本のスキー発達の研究や指導、方向づけ、海外の情報蒐集に大きな役割を果たしていた。

この雑誌が山の先輩や学生達に、山に対する視野を拓けて、兎角、独善に陥り勝ちな殻を破らせた功績は大きく、その上慶応、早稲田、京大の各大学山岳部との交流や、友情を深める機会も作った。また「山とスキーの会」が所蔵する第一巻第一号よりの日本山岳会の「山岳」、英国山岳会の *Alpine Journal* や *エベレスト* への遠征報告その他大部の図書文献によって、山の連中がうけた恩恵は見逃せぬものであった。

雑誌の発行以外に、大正十一年十月には、東京より榎有恒氏を招いてアイガー東北山稜の輝かしい登攀の大講演会を、札幌において「山のスキーの会」主催で行った。この催しは木原均、板倉勝宣両氏の御尽力によるもので、北大を卒業して東京へ帰ったばかりの板倉氏が、わざわざ重い幻灯器械や、種板を担いで札幌へ駆けつけ、大奮闘をされた話が語り伝えられていた。その板倉氏も、その後二カ月位しかたため翌年の正月十七日、立山登山で猛吹雪に遭い、三日間の苦闘も空しく、命を失ってしまった。

また大正十二年と翌十三年の暮には、ハンネス・シュナイダーの映画「スキーの驚異」の第一編と第二編を、「山とスキーの会」主催にて公開を行い、大きな反響を呼んだ。この映画によりスキーは全道に広く普及するようになり、自転車屋や下駄屋でも、店頭にスキーを列べるようになったという。

「山とスキーの会」の運営はすべて学生であったから、面倒なことは手に負えなかったが、月刊誌「山とスキー」の編集は一年ずつの担当で、次から次への順送りであった。編集を担当するものは、どういうわけか大体が山の連中にお鉢がまわっていた。

第一年目は加納一郎、二年目は野口敦（当時は長谷川姓であった）、三年目は赤松勲、四年目は伊藤秀五郎、五年目相川正義、六年目山口健児、七年目から山岳部ができたので新スキー部の井出英次、八年と九年を小川玄一の諸君が担当した。四年目を担当したのは伊藤君であったが、当時まだ兵隊検査前の年齢だった為、新聞紙法により許可が下りず、代って佐々木政吉君が名義人になっていた。七年目以後、編集がスキー部の連中に引継がれてからも、山岳部よりの出稿や、写真の提供は依然として続けられていた。

雑誌「山とスキー」の発行部数は五百部であって、この数字は一号より百号まで変らなかつた。また定価の三十銭も、調べてみたら九年間そのままの据置きであった。そして購読者は北海道を除けば東京が特に多く、次いで関西となっていた。また英独埃瑞や北欧へも送っていたが、これは先方のスキーや山の団体の会報との交換用であった。

さしも一世をリードした専門研究誌「山とスキー」も、その後各大学の山岳部が部報や会報を出したり、またスキー年鑑も発行されるようになって稀少性も薄れるとともに、登山やスキーに国際的な感覚も要求されるようになると、もはや学生だけでは繁務をこなすのは困難となり、さらに経済的の理由もあって、百号をもって廃刊に踏みきった。

これは時代の流れであって、力では阻止できぬものであったと思っている。

さて、山岳部も半世紀を迎えて、立派に歩んだ足跡を振り返るとき、いろいろな遠因近因によって誕生したことを思い起

すが、山岳部が歩み出すや否や、直ちに活潑に歯車が動き出したのは、有能なる部員がまことに多士済済であった為に外ならない。

忽ちにして部の目的や進路が定まり、対内的にも対外的にも態勢を整備強化することができたのは、沢本三郎、伊藤秀五郎という性格の全く対蹠的な二人が、時を同じうして北大に居た幸運によるものと思っている。山岳部第一年度の主任幹事は沢本三郎が、第二年度を伊藤秀五郎が勤めて、ここに部の基礎は磐石となった。

しかしながら、この二人は結局うまくゆかず、その後袂を分かつてしまった。それ以来二人は一度も顔を合せることはなかったし、いくら機会をつくっても頑強に会うことを拒み通した。

山岳部の部員章は和辻広樹君のデザインで出来上り、裏に通し番号がつけられた。一号は部の保存用、二号は栃内吉彦山岳部長へ、三号は沢本三郎、四号は欠号、五号は伊藤秀五郎、六号田中二郎、七号小森五作、八号は私がもらった。

伊藤秀五郎君は大学を出てからも北海道との縁は更に強く、日本山岳会の名誉会員であったり、また名著「北の山」以来の文名も高く、北海道の山を語る者なら誰一人知らぬ者はないが、沢本三郎君は忽然と姿を消してしまい、そのまま杳として山の連中から全く消息を絶ってしまった。

しかし沢本君が山岳部創立に果たした役割りは大きく、忘れてはならぬ人物である。私はこの回想の最後に彼の風貌をつけ加えたい。

彼は明治三十三年東京銀座で生れ、東京府立一中を出て、すぐに第一高等学校に入学したというから凡人ではない。

一高では学問よりスポーツに精を出し、特に山登りとスキーに熱中し、当時三年制であった旧制高等学校に六年在学したが、ついに卒業せずに退学してしまった。さらに徹底してスキーに打ちこむために、大正十四年北大農学部畜産二部専科に入学して我々の前に現れたのである。彼のスキー歴は、大正八年一高旅行部員として高田の歩兵連隊で手ほどきを受けたのが最初であるというが、彼のスキー理論は堂々たるもので、彼に太刀打ちできるものは、当時既に居なかった。

私は彼が大学で何を勉強したのか全く知らない。後に理学部へ転じたとは聞いたが、何年居たのか、いつ卒業したのか

も知らない。しかし彼とはよく山へ出かけ、一緒に札幌交響楽団にも在籍した。彼はゼロ奏者としてもただならぬ才能を持っていたのである。

大学を出て以来、私は地方勤務や軍隊生活が長かったので、久し振りに彼に会った時は戦後間もなくであった。そのとき彼は東京大学伝染病研究所に勤務していたが、相変らずスキーの理論に没頭していた。

昭和三十三年暮、彼は世に跋扈する誤れるスキー理論に大反駁を加えるという意味で、創元社より「新しいスキー」なる一書を刊行して、サワモトセオリーの健在を示した。この時の出版祝賀会は大変なもので、三田綱町の三井倶楽部で榎有恒、麻生武治、黒田正夫、松沢一鶴、三井高孟の諸氏等百余名が集まり、マックアーサー元帥が涎を流したという酒會を前に、一同にて彼の快著を心から祝福したものであった。

彼はもはや八十を目前にして往時の元氣はないが、仙骨さらに磨きを加えて、悠悠自適、渋谷高台のマンションから遙か北海道の空を懐しんでいる。